

鹿が谷川の流^{した}れを慕いあえぐように

山里 将之

みなさん、こんにちは！
貝塚聖書教会の山里将之です。

11月23日、勤労感謝の日の休日を利用して、久しぶりに奈良公園を訪れました。奈良公園といえば、鹿、ですよね。おなじみの鹿せんべいを買っては鹿にあげてみる、という「おきまりのコース」を今回もたどりしましたが、観光客が多く、すでにたくさん食べていたのかも知れません。いつもより「食いつき」は良くなく、拍子抜けするほどでした。その代わり、小川、用水路などの水辺では、おそらく繁殖期と関係しているのか、雄鹿どうしが激しく頭をぶつけ合っている光景があちこちで見られました。奈良公園の鹿を「野生」と呼ぶのはちょっと違和感がありますが、それでも自然界の中に生きる厳しさとたくましさを見た感じがします。



旧約聖書、詩篇に、こんな詩があります。

鹿が谷川の流^{した}れを慕いあえぐように 神よ 私のだましいはあなたを慕いあえぎます。

詩篇 42 篇 1 節、聖書 新改訳 2017©2017 新日本聖書刊行会

クリスチャンの間では非常にポピュラーな詩のひとつで、そのまま曲をつけて讃美歌になっているものもあります。私は、実際の鹿を見ているまでは、とてもどこかで牧歌的な風景を思い描いていたのですが、水辺の鹿というのは実は相当、たくましくて力強いんだなあということを知られました。

動物行動学的には、繁殖期に雌鹿を獲得するための行動と飲水を求める行動には違いはありますが、自然界の中、限られた資源を奪い合うという点ではどちらも真剣勝負、しかもよくよくこの詩を見つめると、ただ水を求めているのではなく、「慕いあえぐ」というかなり強烈なことばが使われていることにあらためて気づかされました。実際、旧約聖書が記されたもともとのことば、ヘブル語でも、通常の「求める」とは区別される、珍しい、それだけに特別なことばが使われていました。

あらためて、この詩篇で歌われている情景を思い描き直してみると、詩人が神を「慕いあえぐ」その気迫、迫力が伝わって来ます。そして、自分自身を顧みます。私は果たして、神を「慕いあえいでいる」だろうか。何となく「求める」というだけでなく、本気で、あえぐように、神と向き合っているだろうか。クリスマスをもなく迎えようとしているアドベントの季節。あらためて、私たちと向き合っ下さる神様と、私たちは、どう向き合うだろうか、という事を考えさせられています。